

平素より当財団に対する格別のご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

本年十月にICPP（気候変動に関する政府間パネル）が特別報告を出しました。このまま温室効果ガスが増え続けると平均気温が上昇し、大雨や大干ばつなどの異常気象が世界各地で発生することが予想されています。わが国でも想定外の地震、記録的な大雨、いのちの危険がありますなどと言った言葉を聞くようになりました。

私たちが推進している「災害からいのちを守る森」は副理事長の宮脇昭博士が提唱している「潜在植生理論」に基づく森であり、日本全国の植生を調査して得た知見をもとに「鎮守の森」をモデルにした「ふるさとの木によるふるさとの森」です。

自然災害が頻発する我が国で、私たちがつくる森は関東大震災では、森に囲われた岩崎別邸に逃げ込んだ人々の命を救い、阪神淡路大震災では広葉樹の樹林帯が延焼

を防ぎ、東日本大震災でも引き潮から多くのもを受け止めました。地域環境に順応したふるさとの緑は非常に強靱なものなのです。

今、東北のみならず全国から「わが町にも災害からいのちを守る森をつくりたい」との声が寄せられ高知県や静岡県、三重県、さらには首都圏にも拡大しています。災害から命を守り、地域の生態系を育む森を子供たちに引き継いでいく、それは次世代に残す宝であると同時に、今を生きる私たちの責務であると考えています。

私たちは「災害からいのちを守る森」づくりを全国に展開して参ります。引き続き皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

平成三十年十二月

公益財団法人 鎮守の森のプロジェクト
理事長 細川護照

副理事長 宮脇昭メッセージ 森づくりはあなたが主役

誰が木を植えるのか

これまで木を植えて森をつくることなどは、多くの人にとっては他人事で、林業家か庭園をつくる人だけの仕事と思われてきました。しかし、私たちの周りからふるさとの森、遺伝子を守る本物の森が消えていっている現在、他人事としていてよいのでしょうか。森の消滅のため、日本各地では地震、火事、台風、洪水、吹雪などによって大きな被害がもたらされています。

森を単に木材生産や美化だけの対象として考える時代は終わりました。自分や愛する人、さらには隣人の生命を守るために、また共存者として多くの動物、植物が地球上で間違いなく未来に向かって生き延びていくために、いのちの木を植え、森をつくっていく—このことがようやく理解されるようになってきました。では、いったい誰が木を植えるのでしょうか。

私たちが、明日を生きる人のために

今こそ、明日を生きるために何をすべきかを、みなさんとともに木を植えながら考えるときです。一人、二人が木を植えても大したことはないと思うかもしれませんが、一人が10〜20本植えるとして、日本の1億2千万人が、地球の65億人が木を植えたとしたら、いったいどれだけ多くの森ができるのでしょうか。その森が、どれだけ防災・環境保全林、水源涵養林としての機能を果たし、どれだけ多くの心安らぐ場所を与え、どれだけ温暖化の元凶といわれるカーボンの吸収に固定に役立つでしょうか。森をつくることで、今を生きる人、明日を生きる人のいのちをどれだけ守ることができるか、考えてほしいのです。

森は、幅1mからでもつくることができます。いのちの木を、大地に手をつけて植える。この、時には厳しいけれども心に響く静かな感動、喜び、素晴らしさを、あなたのため、あなたの愛する人のため、人類の今と明日、未来のために、さらに広げていきたいと願っています。

このメッセージは、NHK出版「苗木3000万本のいのちの森を生む」(著・宮脇昭) 河出書房新社「森の長城が日本を救う」(著・宮脇昭)より引用しています。

公益財団法人 鎮守の森のプロジェクト

副理事長

宮脇昭